無題

聖なる歌の向こうからやって来る
黒雲のような不快な眠り
そこに映し出されている顔は
あくまで穏やかな慈愛を演出する

プラスチックに埋め尽くされた街に
あるのはただ、規則性だけであって
わかりきった世界においては
祈りというものは存在しない

紙のような感情が水に浮かんでいる
もはや、そのようなものが記されることはなく
無関係性の中から湧き出す小川―――
すなわち記号として表現するにすぎない

片方で高精度な再生装置を作り上げ
もう一方では、自らの感覚をすり減らし
感覚器官の能力を退化させてゆく
昆虫の複眼に回帰するような・・・

森を出て草原を歩き始めた時から
単純な道具を使い始めた時から
火を見出した、その時から
既に内在されていた末路

創造紳たちは、ほくそ笑んでいる

(2011.8.7)